或問　WAKUMON　113
No.33,（2018）pp.113-127

山崎豊子の戦争観について
――『不毛地帯』を中心に

李瑞華

はじめに

日本の社会派小説の代表的な作家である山崎豊子は、1970 年代から戦争題材の小説創作に没頭し、約 20 年にわたって「戦争三部作」[1]を創作した。その第一作としての『不毛地帯』は戦後のシベリア抑留と高度経済成長期の商社を舞台にした作品である。この小説は「サンデー毎日」で連載中の 1973 年に、シベリア抑留の描写をめぐって「盗用事件」として問題となった。1976 年に「ロッキード事件」[2]が明るみに出たり、1978 年に「ダグラス･グラマン事件」[3]が発覚したり、山崎は予知能力があるのかと話題にもなった。そして、『不毛地帯』が実に 30 年ぶりに映像化され、2009 年にフジテレビ開局 50 周年記念ドラマとして放映された。

山崎小説の研究について、日本国内では、鵜飼清氏は批判的な立場で『不毛地帯』における創作方法やシベリア抑留の描写及び主人公に関わることなどを詳しく検証している。前川文夫氏は『不毛地帯』の創作中に発生した「盗用の疑い」を客観的に評価している。洋泉社が出版した『山崎豊子･全小説を読み解く』の中で、『不毛地帯』を詳しく分析し、同名の映画作品の評価も加えている。[4]中国では、李徳純氏は、文学の視点から山崎小説の魅力を論じている。夏剛氏は山崎小説の個性と普遍性を詳しく述べている。葉琳氏は社会小説の創作モードと社会派作家の文学的な性向を総合的に述べている。鮑同氏は『不毛地帯』に現れた山崎の反戦思想には特殊な「帰」と「和」という要素を含まれているとコメントしている。[5]

---

[1] 即ち、『不毛地帯』(1976 年-1978 年単行本)、『二つの祖国』(1983 年単行本)、『大地の子』(1991 年単行本)。

[2] ロッキード事件とは、アメリカの航空機製造大手のロッキード社による主に同社の旅客機の受注をめぐって、1976 年 2 月に明るみに出た世界的な大規模汚職事件。田中角栄元首相が同年 7 月に逮捕された。

[3] ダグラス･グラマン事件とは 1978 年 2 月に発覚した日米･戦闘機売買に関する汚職事件。

[4] 鵜飼清『山崎豊子問題小説の研究』、社会評論社、2002 年。前川文夫『山崎豊子への誘い』、白地社、2005 年。山縣基与志等編『山崎豊子･全小説を読み解く』、洋泉社、2009 年。

[5] 李德纯：《在命运的背悖与冲突中挖掘人生--论石川达三和山崎丰子的创作》，《外国文学评论》，1993 年第 03 期，第 92 页。夏刚：《从《白色的巨塔》到《两个祖国》—论山崎丰子的“社会派”长篇小说》，《外国文学研究》，1987 年第 02 期，第 57 页。叶琳：《论日本战后“社会派”文学家的文学创作》，《外语研究》，2007 年第 05 期，第 93 页。鲍同：《山崎丰子文学研究》，中国人民大学出版社，2015 年。

シベリアなどでの徹底した現場の取材により、リアルに描写されているこの小説において、「不毛地帯」とは一体何か。山崎がこの小説を執筆するに至った経緯とは何か。それと事実とはどのような関係があるか。『不毛地帯』を通して、戦後経済の発展の裏に生じた社会問題は何か。そして、以後の社会にどのような影響を及ぼしたのか。本稿は、時代背景と先行研究を踏まえ、戦前・戦中・戦後の歴史を分析し、上述した問題をめぐって、『不毛地帯』における山崎豊子の戦争に対する思想の源を明らかにしてみたい。

1 戦争と1940年体制

小説の冒頭で、近畿商事の社長である大門一三は、その当時の日本の経済情勢について、「終戦と同時に解体された旧財閥系の商社が、最近、合同し、再び曾ての財閥商社として息をふき返して来つつあること」[6]が気にかかっていた。そのため、「近畿商事に必要なことは、旧財閥系商社に対抗し得る組織力を備えることであった。それには大局的にものごとを判断し、企業を組織的に動かす人材が必要であった」[7]。さらに、業務本部から経営会議に提出された「経営三ヵ年計画」では、「繊維の売上で総合商社第三位の地位を保っている近畿商事の経営体質の脆さ」[8]を鋭くえぐり出していた。総合商社として、「鉄鋼原料の商売、すなわち資源開発関係に会社のエネルギーを集中すべき」[9]だし、「将来の布石のために、重化学工業化の路線を進めねばならんことは自明の理」[10]であった。

「終戦と同時に解体された旧財閥系の商社」とは、第二次世界大戦終結までの同族支配による巨大な独占企業集団のことで、1945年−1947年に行われた「財閥解体」は、戦後の経済民主化措置の一つである。そして、「柔軟で、賠償や解体の指定を受ける危険の少なかった中小企業こそが、戦後の危機に創造的に対応できた」[11]のである。しかし、大門社長が気にかかったことは取り越し苦労ではない。経済学者の中村隆英氏[12]によると、1945年から1955年にかけての日本には、「銀行と企業の関係が深く」なって、旧財閥系などのような金融系列が出来た。「旧財閥系以外の多くは戦時中の軍需会社指定金融機関制度以来の関係」である。「グループ各社は各産業に分散していて、必要があれば一緒に新しい仕事をする」のである。経済学者のマーティン・ブロンフェンブレナー氏は、「主要都市銀行が財閥の中枢として解体された持株会

---

[6] 山崎豊子『不毛地帯(一)』、新潮文庫、2005年、10頁。
[7] 山崎豊子『不毛地帯(一)』、新潮文庫、2005年、10頁。
[8] 山崎豊子『不毛地帯(二)』、新潮文庫、2005年、438-443頁。
[9] 山崎豊子『不毛地帯(二)』、新潮文庫、2005年、446頁。
[10] 山崎豊子『不毛地帯(二)』、新潮文庫、2005年、448頁。
[11] ジョン・ダワー［著］三浦陽一・高杉忠明・田代泰子[訳]『増補版 敗北を抱きしめて(下)』、岩波書店、 2004年、349頁。
[12] 中村隆英『昭和経済史』、岩波書店、2007年、249-251頁。

社にとって代わりはじめた」と指摘している。[13]つまり、それは間接金融方式と言われ、経済学者の野口悠紀雄氏[14]も「その下での資金の流れは、金融市場における統制によって強くコントロールされた」と述べている。この金融コントロールによって、「はじめて資本集約的戦略産業への重点的資金配分が可能になり、戦後日本の高度成長の柱となった重化学工業化が可能となった」と野口は考えている。こうした意味で、金融体制における「戦時体制」の維持は、「高度成長を支える最大の要因であったということができる」と野口は述べている。

この「戦時体制」とは、1930年代のはじめから、太平洋戦争という総力戦が軍部と官僚の一部によって強力に推進された戦時経済体制、即ち「1940年体制」のことである。この1940年体制が「経済の基幹的な部分では、はるかに重要な役割」[15]を果たした。そして、ジョン・ダワー氏[16]によると、「戦後の諸制度には、戦時のシステムから引き継がれた」ものがあった。少数の民間銀行への金融依存度の増大や、産業の下請けネットワークも、「戦争のシステムの一部であったが、これらはすべて、戦後経済において系列と呼ばれた構造をささえる心臓部となった」としている。「大企業では、株主への配当よりも、いわゆる終身雇用を含む雇用の安定が重視された」。これが戦後日本に特有のシステムとして特筆されるが、「本当の起源は戦争中に発する」とダワーは指摘している。さらに、経営や産業に対して政府が積極的に役割をはたす「行政指導」のようなものも、「戦争に起源がある」というのである。「敗戦の苦難の中で、先の見えない戦後危機に直面した多くの日本人」がやったことは、「本質的には従来の制度を維持する」ことであった。

さらに、ダワーは、「後に“日本モデル”と呼ばれ、儒教的価値のレトリックで覆い隠されたものの多く」は、じつは「単に先の戦争が産んだ制度的遺物だったのである」と説き明かしている。「戦後日本の設計者たちもこうした遺産を改造しつつ維持していった」。しかし、「彼らが背広を着たサムライだったからではなく、気の抜けない厳しいこの世界で最大限の経済成長を推進するためには、それが合理的なやり方だと信じたからなのである」とダワーは論じている。

上述のように、1940年体制は、高度成長を実現するために大きな効果を発揮したのである。その一方、野口は、「占領軍が金融改革に全く手をつけず、その結果戦時型の金融体制がそのまま維持された」ことは、「高度成長のための極めて重要なファクターであったといえる」[17]

---

[13] Martin Bronfenbrenner,"Monopoly and Inflation in Contemporary Japan,”Osaka Economic Papers 3.2(March1955),42-43.

[14] 野口悠紀雄『1940 年体制(増補版)』、東洋経済新報社、2010 年、102-105 頁。

[15] 野口悠紀雄『1940 年体制(増補版)』、東洋経済新報社、2010 年、93 頁。

[16] ジョン・ダワー［著］三浦陽一・高杉忠明・田代泰子[訳]『増補版　敗北を抱きしめて(下)』、岩波書店、 2004 年、389 頁。

[17] 野口悠紀雄『1940 年体制(増補版)』、東洋経済新報社、2010 年、105 頁。

と示している。ダワーも、「経済の面に関して、占領軍は官僚組織の力を抑制しなかったのである」[18]と指摘している。もちろん、占領軍は、「農地改革、財閥の持ち株会社の解体、労働組合にかつてなかったほどの権利を付与した法律の制定」と「軍事組織を除去し、警察と地方政府を支配する強力な官庁であった内務省を解体」した。しかし、1940年体制に対して、「占領軍は便宜のために手をつけなかった」。なぜかというと、「既存の経路を使うほうが、占領政策の実施が容易であったし、すでに状況が混乱している上に、システム全体を根本的に変えれば、大混乱が生じるかもしれなかった」からである。そうすると、「占領軍は日本の強力な官僚的権威主義をさらに強力にしたという責任」がある。「ここにこそ、戦後の“日本モデル”が本質的にはアメリカとの交配的な性格」のものであったと見るべき根拠がある。即ち、「占領軍は、到着した瞬間から日本の官僚組織を保護」した。そして、それによって「官僚組織の役割と権威を高めた」。やがて「冷戦的な思考」が大勢を占めるようになり、占領政策の“逆コース”がはじまったとき、「行政の“合理化”」を進めて、結果的に「官僚の権力をさらに少数者の手に集めた」のは、「アメリカ占領軍にほかならなかった」のである。さらに重要なことに、「強力な官庁である通商産業省が創設された」のが、占領が終わる三年前であったという事実は、「日本の官僚組織を強化したのはアメリカであったことを最も鮮明に示す例である」とコメントしている。

戦後社会の方向は、政治から経済へとまっしぐらに突き進んでいくことになる。さらに、朝鮮特需(1950-1953年)もあって、ジリ貧だった日本経済は、1956年の『経済白書』に“もはや戦後ではない”と記されるまでの復興を遂げている。そして1960年に「所得倍増計画」が発表されると、日本は高度経済成長へと邁進し始めた。とくに、1966年から始まる「いざなぎ景気」に日本全体が沸く中、鉄鋼業界にも再び繁栄が訪れる。この時期は自動車産業が急速に成長した時期でもあり、世界トップクラスの性能を持つ日本車は海外でも脚光を浴び、年々輸出を伸ばしていった。[19]この復興を牽引し、高度成長を実現するために、それを支える基本的な要因となったのが1940年体制である。そして、「現在に至るまで、この体制は変わらなかった」[20]。

山崎はこのような強固な制度を拠り所としていた高度成長期を背景に、その裏の構造を掴み、小説の中で、戦闘機導入やアメリカの自動車産業との業務提携及び中東の石油開発などをめぐって物語を展開させていくのである。

2 戦後日本の「不毛地帯」

---

[18] ジョン・ダワー［著］三浦陽一・高杉忠明・田代泰子[訳]『増補版 敗北を抱きしめて(下)』、岩波書店、2004年、390頁。

[19] 山縣基与志等編『山崎豊子・全小説を読み解く』、洋泉社、2009年、102-103頁。

[20] 野口悠紀雄『1940年体制(増補版)』、東洋経済新報社、2010年、155頁。

このような高度成長期を背景としたこの小説の「不毛地帯」は一体何か。

山崎によると、「不毛地帯」とは「精神的飢餓状態」[21]を意味している。1965 年以降の日本は経済成長が異常な勢いで進み、「確かに物質的には豊か」になった。しかし、「あらゆる人間の欲望が金銭で解決できる」という思いが人々の中で強くなり、「精神的には全く頽廃した」と山崎は捉えていたのである。それは「政治のみならず教育問題にまで及び、大人の世界ばかりか子供の世界にまで蔓延」していた。そのため、「日本全体が不毛地帯と云っても過言ではない」と山崎は訴えて、「白い不毛地帯」と「赤い不毛地帯」という二つの「不毛地帯」の中で、主人公の生き方を通して戦後 30 年間の日本人の心の歩みを描いたのである。

2.1　白い不毛地帯

小説の前半は、主人公のシベリア抑留11年と、シベリア帰還後商社に入り、防衛庁の次期主力戦闘機の売り込みの商戦に巻き込まれていく「白い不毛地帯」である。

2.1.1　現実的な不毛地帯

小説の中のシベリアは「物理的な環境、つまり現実に不毛地帯である」[22]、と山崎は述べている。なぜ山崎は主人公をシベリア抑留に設定したのか。

シベリア抑留について、日本の歴史学者の吉田裕氏[23]は「アジア･太平洋戦争の終結後」、ソ連政府は「中国東北地方･サハリン･千島列島で捕虜にした約60万人の日本軍将兵をシベリアに」移送し、「強制収容所で苛酷な労働に従事」させた。その結果、「約6万人の日本兵が死亡した」とされている。しかし、「戦没者の遺族に対する支援、戦没者の追悼など、多岐にわたる」戦後処理が不十分なので、「『戦後』が終わらないということでもある」と氏は指摘している。

ソ連崩壊の前後から、「ソ連政府、ロシア政府は、抑留が誤った政策であったことをようやく認め、数次にわたって死亡者名簿を日本側に提供」してきた。しかし、「正確な日本人名を確定してゆく作業」には、「大きな困難」が伴ったのである。抑留者の一人であった「村山常雄は、一人でこの困難な作業に取り組ん」でいた。村山は「70 歳になってからパソコンを習い」、「名簿などの各種のデータを入力」し、「ダブリをチェックしながら抑留死亡者 4 万 6300 名分のデータベースを完成」した。しかし、このデーターベースは「死亡者の全てを網羅」しているわけではない。

「国がやるべき仕事を個人が肩代わりしたことになる」が、村山には、「戦没者には、一人ひとりの個性や人生がある以上、固有の人名を明らかにすること」こそ、「死者に対する慰霊や追悼の前提だ」という強い信念があった。村山は次のように書いている。

---

[21] 山崎豊子『作家の使命･私の戦後』、新潮社、2009 年、24 頁。

[22] 山崎豊子『『大地の子』と私』、文藝春秋、1999 年、12 頁。

[23] 岩波新書編集部『日本の近現代史をどう見るか･シリーズ日本近現代史⑩』、岩波書店、2010 年、144-148 頁。

「弔う」とは［中略］「とぶらう(訪ぶらう)」こと、すなわち「問う」こと、「問いたずねる」ことと解せますが、さらに言えば「死者の枕辺に寄り添い、親しくその人の名を呼び、その声を心に聴く」ことであると考えます。死者は一人ひとりねんごろに、その固有の名を呼んで弔われるべきであり、この人たちを「名もなき兵士」や「無名戦士」と虚飾して、人類史の襞に埋めもどす非礼は決して許されることではありません。名を呼び、問いかけ、その声を聴く。そんな真心こめた祈りこそが、真の「弔問」であり「慰霊」となり、弔問者自身とそれを含む国と社会の再生を促す力ともなるのではないでしょうか。[24]

村山にとっては、全ての抑留死亡者の個人名を確定してはじめて、慰霊も追悼も意味がある。「このような状況があるからこそ、人々の関心が絶えずかつての戦争に向けられるのだ」[25]と吉田は考えている。

山崎は『不毛地帯』の取材を始めた時、「一人でハバロフスクからイルクーツクを経、モスクワに辿り着くシベリア横断」をしたり、「抑留体験者の一人ひとりを訪ねて取材した」[26]のである。そして、「『シベリア帰り』と知れると、職場で思想的に色眼鏡で見られる」状況もある。「戦争とそれに続く苛酷なシベリア体験もかなり曖昧な形で戦後30年の年月の中に消え去ろうとしているよう」だが、「シベリアの収容所における日本人の抑留生活は、戦後の日本人の歴史のなかで、眼を覆って通り過ぎることのできない歴史的事実で、この辺のことは永久に消してはならないものだ」と山崎は考えていたのである。

さらに、山崎は「シベリア抑留は、ソ連の国家ぐるみの捕虜虐待」であり、「20 万人に及ぶ死亡、行方不明の事実」を考える時、「広島への原爆投下」とともに、「私たち日本人は告発者の立場であることを忘れてはならないだろう」[27]と強く訴えている。

主人公壱岐正のシベリア抑留の体験は小説の終始を貫いている。そして、壱岐の軍人生涯といった第一の人生において、抑留した11年は壱岐にどれほどの影響を及ぼしたか測り知れない。小説の終章で、商社マンになって、株主総会で「シベリア帰りの赤大根」[28]と野次られた壱岐は近畿商事を退社し、「朔風会の会長を引き受けて」[29]、「舞鶴に慰霊碑を建て、シベリアの荒野で眠っている遺骨の収集を果たす」ために、「第三の人生はそのことに尽くしたい」というシーンがある。

---

[24] 村山常雄『シベリアに逝きし 46300 名を刻む』、七つ森書館、2009 年、22-24 頁。

[25] 岩波新書編集部『日本の近現代史をどう見るか・シリーズ日本近現代史⑩』、岩波書店、2010 年、148 頁。

[26] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009 年、11-25 頁。

[27] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009 年、15 頁。

[28] 山崎豊子『不毛地帯(四)』、新潮文庫、2005 年、245 頁。

[29] 山崎豊子『不毛地帯(五)』、新潮文庫、2005 年、566-569 頁。

つまり、主人公のシベリア抑留生活を通して、山崎はこの苛酷なシベリア体験という歴史の事実と、戦後、それから発生した様々な社会問題を人々に直視させ、戦争の不条理さと戦争がもたらした癒し難い心の傷を絶えず再現しているのである。

2.1.2　精神的な不毛地帯

シベリア帰還後、第二の人生を過ごし始めた壱岐が「活躍する戦後日本は、一見、経済的繁栄を遂げているが、実は精神的不毛地帯にほかならない」[30]、と山崎は述べている。壱岐は近畿商事に入社したとたん、防衛庁の戦闘機買付けに携わることになり、それが総理まで介在する汚職事件に発展した、というシーンがある。その2年後、実際にロッキード事件が起きた。それは、「分析や計算などで予見出来るもの」[31]ではない。山崎は取材中に、当時の衆議院決算委員会議事録を読んだ時、「質疑応答の中から政治的腐敗の臭いが漂ってくるように思え、これはいつか大きな問題に発展するのだと感じた」のである。そして、このシーンを設ける真意について、山崎は、「結局、国民の戦争アレルギーを口実に、誰もが国防という問題を真正面から取り組もうとしないために起る日本の悲劇である」と考え、小説の中の「次期主力戦闘機をめぐる商戦」は、「単にロッキード事件に類似したもの」ではなく、「こうした防衛庁と政府の防衛問題に対する姿勢も、一つのドラマに作り上げてみた」[32]とコメントしている。

日本の敗戦の焼け野原から復興への歩みは1946年から始まる。この年に発表された「傾斜生産方式」は、少ない資源を効率的に配分し、急速な産業育成を促す政策である。その「産業目標設定は「最も基本的なエネルギー生産」と「基幹重化学工業」に資源を廻すことで、「経済の全体的回復を刺激することを狙っていた」[33]のである。そのため、「これは汚職にうってつけのシステムをつくり」、「実業者、官僚、政治家は時を移さずその濫用に」取りかかった。このように、「賄賂が資金を呼び込み」、その「資金の一部が礼金やさらなる賄賂」になったのである。こうした「違法な金の流れる下水管はあらゆる方向に溢れ出した」が、「汚職は傾斜生産方式の予期せぬ副産物にすぎなかった」とダワーは指摘している。それにもかかわらず、「この戦後初のマクロ経済政策の遺産」は、その後「長く跡をひいた」のである。「基幹の重化学工業に関心が集中」し、「戦後の上層部の産業政策立案崇拝が制度化」され、さまざまな「経済イデオロギーが結び付けられ、あるいは融合」され、「政府と大企業がいっそう親密に結びついた」のである。

このような戦後経済の発展の裏に横たわったどす黒い闇を掴んだ山崎は、「戦後の日本を経

---

[30] 山崎豊子『『大地の子』と私』、文藝春秋、1999 年、12 頁。

[31] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009 年、47 頁。

[32] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009 年、40 頁。

[33] ジョン・ダワー［著］三浦陽一・高杉忠明・田代泰子[訳]『増補版　敗北を抱きしめて(下)』、岩波書店、2004 年、351-353 頁。

済立国たらしめたのは、商社の力が与って大きかったことは事実」[34]であると同時に、「その経済成長のひずみから、精神的不毛を醸し出したのも商社だ」といみじくも看破している。そして、「その実体はあまりに複雑すぎて、その部分部分しか私たちには解らない」が、「戦後の日本経済を形成するうえで大きな役目を果たした“総合商社”をこんなに曖昧な理解の仕方で過ごしてしまっていいものか」と山崎は疑問を持っている。小説の中で、二次防のFX戦の時、空幕の芦田二佐に現金代りの株券を渡すことであろうと、石油開発で田淵総理邸を訪れ、孔雀の餌として送られた1000万円であろうと、山崎はこの「政府と大企業がいっそう親密に結びついた」ことを読者の前に生き生きと描き出している。

2.2　赤い不毛地帯

後半は、アメリカのビッグスリーの一つであるフォーク自動車メーカーとの資本提携と、中東の石油開発に取り組む「赤い不毛地帯」である。石油戦争はこの本全体でも相当の比重を占めている。次は石油開発についてのシーンである。

「壱岐さん、日本が戦争に負けたのは石油がなかったからじゃありませんか」
壱岐の胸に、兵頭の言葉が強く響いた。石油を獲得するためにマレー上陸を作戦し、スマトラのパレンバンの油田に落下傘部隊がいち早く降下したのも、もって石油のためであった。
「壱岐さん、僕たちの陸士時代は石油不足のために、戦車の演習をしていても、時間が来たら打ちきられ、機械の手入れは近くの農家で菜種油を一升、二升と分けて貰ってやり、戦場に出ても、石油がないため戦車が動かせず、石油を持たない恐ろしさは骨身にしみており、今もって石油の一滴は、血の一滴という言葉は脳裡を去りません」。[35]

「石油の一滴は、血の一滴」という言葉から、戦争中の日本にとって石油の重要性が生々しく描き出されている。「日本が20世紀の大半をとおして西欧の先進技術に依存し、20世紀すべてを通して、基本的に不可欠な原材料、特に石油を、輸入に依存してきた」[36]と佐藤誠三郎は書いている。しかし、1930年代が進むにつれ、アメリカは「日本の野心を挫く決意」をますます強くし、日本が大きく攻勢に出るたびに「経済的な報復をもって」[37]対応した。日本は「ドイツとの同盟により」[38]、「東南アジアに地歩を築き」、その結果、「石油その他の必要物資の獲得が可能になる」かもしれない。そして、「同盟国ドイツが日本に軍事物資や(占領地域から

[34] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009年、25頁。
[35] 山崎豊子『不毛地帯(四)』、新潮文庫、2005年、116-117頁。
[36] 児島襄他『人類は戦争を防げるか』、文藝春秋、1996年、143頁。
[37] 児島襄他『人類は戦争を防げるか』、文藝春秋、1996年、88頁。
[38] 入江昭『太平洋戦争の起源』、東京大学出版会、1991年、172頁。

の)石油を供給することが期待できるかもしれない」という日本海軍上層部の考えを入江は指摘している。そして、1941年7月15日以降、「日本はまったく石油を入手できなくなった」のである。このころには「日本の依存度は深刻の極に」達していたために、米国による対日石油禁輸はほとんど戦争行為と見なされた。これに対する「日本の回答が軍事行動」[39]だったのである。

その一方、日本の統帥部は、米国の石油禁輸のため、「日本が石油供給源を東南アジアに求めるのはやむを得ない」ことだとし、そのためにも、「東南アジアを大日本帝国の版図に組み入れる軍事行動が必然となる」[40]と考えた。佐藤誠三郎、家永三郎、入江昭の三氏が言っているが、日本が1941年7月に「南方進出」外交政策を決断して、その「頂点に達したパール・ハーバー攻撃」の「重要な要因だったのが石油」[41]である。1941年11月20日に開催された大本営政府連絡会議で決定した「南方占領地行政実施要領」には、「日本側の明瞭な国家意志」が「東南アジアにおける重要戦略資源の軍事力による獲得だ」[42]と吉田は指摘している。このように、「太平洋戦争を挑発した日本と米、英らの帝国主義国家」が、アジアと太平洋地域の「植民地を再分割する帝国主義戦争」であり、「植民地主義戦争」であり、また「この地域における覇権を争う戦争」でもあった[43]。

終戦後、高度成長期に邁進してきた日本にとって、石油情勢がもっとも厳しいと言える1970年代の石油危機は、世界経済を大混乱に陥らせた。「日本ではこの当時、使っているエネルギーの四分の三は石油で、その大部分が中東からくる」と中村は述べている。さらに、「石油が不足で買えなくなるという噂」が広まり、「石油をはじめ、ほとんどすべての価格が急上昇」して、「終戦直後のインフレ以来見られなかった大インフレーション」である。「その当時、福田赳夫氏がこの状況を「狂乱物価」と呼んだ」[44]と中村は指摘している。それに加えて、「供給面からのコストプッシュ要因によって、日本経済は火に油を注がれた事態となった」[45]のである。小説の中では、次のシーンもある。

三十年前だって、日本は東南アジアの石油資源を封鎖され、大東亜戦争に突入していったというのに、今のような石油消費国の日本に、石油が一滴も入　って来なくなったら、この高度成長、GDP世界第二位の経済大国も泡と消え、日本列島はまさに大パニッ

[39] 入江昭『太平洋戦争の起源』、東京大学出版会、1991 年、225-226 頁。
[40] 入江昭『太平洋戦争の起源』、東京大学出版会、1991 年、225-226 頁。
[41] 児島襄他『人類は戦争を防げるか』、文藝春秋、1996 年、150 頁。
[42] 吉田裕『アジア・太平洋戦争　シリーズ　日本近現代史⑥』、岩波書店、2007 年、28-29 頁。
[43] 児島襄他『人類は戦争を防げるか』、文藝春秋、1996 年、216 頁。
[44] 中村隆英『昭和経済史』、岩波書店、2007 年、318-321 頁。
[45] 野口悠紀雄『1940 年体制(増補版)』、東洋経済新報社、2010 年、211 頁。

クに陥りますよ。[46]

このように、戦争中で石油不足を体験し、戦後高度成長期における石油の重要性もしみじみと実感した壱岐は、「躊躇いながら、妻子を養うために商社へ入り、身も心も汚れ、首まで浸かりそうになった時、一企業の利潤のためだけではなく、国家のために成すべき石油確保」という「責務が自分に課せられている」[47]と考えたのである。その後、経営会議で、石油開発について、里井は「真珠湾攻撃で日本を戦争に追い込んだあの暴挙を、懲りもせずまたわが社でおっぱじめるつもりか」と強く反発したにもかかわらず、壱岐は、「いや、確かに第二次大戦は、石油で始まり、石油で敗れました。それだけに私は、曾て武力で得ようとした石油を、日本の将来のために、平和な形で得ようとしているのです」[48]と落ち着いて答えたのである。つまり、壱岐はこの戦争の性質をよく考えて、再び戦争の過ちを繰り返さないように、「平和な形で」石油開発をしようとしている。

山崎はイランで取材する時、「何人かのオイルマンの顔を今も」覚えて、「その顔は、日夜、中東の苛烈な気候と特殊な社会風習の中で、日本の生命線である石油確保のために闘っている男の顔」であり、「今、日本で出会うことのない顔、日本で失われつつある心と、遥けき砂漠の国で出会い、心搏たれたところに、現代の日本の精神的不毛が象徴されていると云えよう」と述べている。さらに、「石油の問題もそうだけど、日本人は大事なことをすぐ忘れる」と山崎は訴え、「そういう精神的飢餓に対する一つの警鐘」として、この「赤い不毛地帯」が「大きな発想のもとになったと言える」[49]のである。

3 『不毛地帯』を執筆した経緯

なぜ山崎は『不毛地帯』という戦争題材の作品を執筆したのか。ここからは戦時中の学生としての山崎の体験を見てゆくこととする。

山崎の学業は1944年、旧制の京都女子専門学校を卒業する前に打ち切られた。2年しか学校に行っていないのにもかかわらず卒業証書を出されたのである。山崎はクラシック音楽を好んだが、当時西洋音楽は敵性音楽とされたため、布団をかぶってレコードを聞いていた。そして、男子学生は、学徒動員令で数多く特攻隊として片道切符で死んでいった。女子学生は軍需工場へ行って弾磨きや軍衣の縫製をさせられていた。粗食と過労、また米軍の空襲で死んでいった友がいる中で、山崎は生き残った。作家として原稿に向かう時、山崎の心を貫いているものは、

[46] 山崎豊子『不毛地帯(三)』、新潮文庫、2005年、330頁。
[47] 山崎豊子『不毛地帯(四)』、新潮文庫、2005年、499頁。
[48] 山崎豊子『不毛地帯(四)』、新潮文庫、2005年、541頁。
[49] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009年、31-44頁。

そのような戦争で死んでいった友人に対する思いである。[50]その思いに突き動かされ、生きて歴史の証人として、常に何をなすべきかという思いを胸に、山崎は戦争題材の作品を執筆したのである。

そして、89 歳で亡くなった山崎が、20 歳から 21 歳にかけて書いていた日記が大阪府堺市の旧宅で見つかった。山崎の日記は他に残されておらず、デビュー前に書かれたものが見つかるのも初めてである。1945 年 1 月 1 日から 3 月 27 日までの記録で、大阪大空襲の体験から「戦争は絶対いけないものだ」と書いた。以下がその記録の一部である。

一月二十日

途中、警報にかかる。待たされた電車にやっと乗れたかと思うと、敵機来襲で、線路側の防空壕へ飛び込む。いやな爆音が聞えて来る。こんな汚い壕の中で知らない行きずりの人と死ぬかと思うと、堪らなくなった。

三月十四日

御堂筋は既に両側は火の海だ。煙たい煙となまぬくさ、息苦しい。窒息するのではないかと思った。……この無惨、惨状、戦争は絶対いけないものだ。人類の不幸は戦争から始まるものだ。ああ平和、これこそ今、全世界人類の希求するものだ。白煙のもうもうと立ち上る焼けただれたこの姿、私の胸から一生忘れられない焼印だ。[51]

大阪大空襲の後「忘れることの出来ない日」として山崎の自宅が焼失した様子を生々しく書き残してあった。近くに焼夷弾が落とされ「もうここで遂にむしやきか」と観念しながらも、母を励ましながら火の海となった御堂筋を逃げた。しかし、自宅は焼失した。一帯の焼け野原を見ながら「この無惨、惨状、戦争は絶対いけないものだ」「私の胸から一生忘れられない焼印だ」と実感を込める。その中で、安否の分からなくなっていた弟を捜しに行ったのである。

武、稔にまだ会えぬ、もしや死んだのではなかろうか。そんな事ないにしてもお腹をすかして二日もどこをさまよい歩いているのかしら。……しかもまさかと思っていた弟達にめぐり会えた時の幸福さには思わず声をあげて泣いた。[52]

「弟達にめぐり会えた時の幸福さには思わず声をあげて泣いた」という表現は戦争がもたらした実感であり、そのような戦争の真実の場面がしみじみと感じられる。このような体験があったからこそ山崎にとって戦争が重く受け留められているのである。

---

[50] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009 年、108-110 頁。

[51] 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015 年、42-56 頁。

[52] 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015 年、52-53 頁。

日本の歴史学者の吉田裕氏は、「戦争責任、戦後処理の問題にひとまずの結着をつけた日本社会」は、「経済復興から高度成長の時代へと突き進んでゆく」が、「そうした社会状況は、戦争の時代を、遠く過ぎ去った過去、振り返るに値しない過去とみなす風潮を生んだ」と指摘している。「戦争体験の継承という面で、そこには「深い断層が存在」していた。さらに、「日本人の戦争認識、あるいは平和認識は、冷戦の終焉などを背景にして」、「大きな岐路にたたされることになる」と吉田は述べている。その一つの変化は、「戦争体験世代の急速な減少」である。「直接の体験や実感に支えられた戦争認識や平和意識に大きな陰りが見え始めるようになった」。「直接の体験に基づかない『戦争の記憶』の占める比重が決定的となった」[53]とも言える。このように、戦争体験を持つ山崎は、「戦争を忘れるということは恐ろしいことだ。自殺と一緒だ」[54]と述べている。それと共に、山崎は、この深い断層にも気づいたからこそ、この小説を通して、歴史や社会問題を多くの人々に伝えていると言えよう。

4 『不毛地帯』における山崎の戦争観の特徴

『不毛地帯』は1973年8月12日から1978年8月27日に「サンデー毎日」[55]に連載され、ベストセラーとなった作品である。前述したように、『不毛地帯』における山崎の戦争に対する認識と考えが旗幟を鮮明にして反映されている。その特徴は次のように三つあると考えられる。

その一つは、現実の事件や人間などを小説的に再構成することである。山崎はそれらをモデルにした、「時代を揺さぶるような仕掛け型の大河小説を得意とする小説家」[56]といえる。しかし、その仕掛け方において、『不毛地帯』ほど「血の出るような切れ味」を持った作品は他にない。歴史の裏を生き抜いた実在の人物、しかも故人や引退者でなく、当時まだ生きている人物を題材にするなどということは、「その他のフィクション主体の作品とは明らかに一線を画している」と言えるだろう。

山崎は『不毛地帯』の取材を1973年から1978年まで5年間にわたって行った。取材のため、山崎の行動範囲はシベリアをはじめとして、イラン、サウジアラビア、クウェート、インドネシア、インド、アメリカ、シンガポールなど十カ国へと及んだ。山崎は取材で得た事実を厳しい目をもって判別し、仕事のこととなると一切妥協せず、相手の都合も考えず、傍若無人なところもあって、「取材の鬼」[57]と呼ばれていた。松本清張氏は山崎の全集に寄せて、「取材に徹底するのはリアリズムを重んずるからである。人の話や本の上での想像だけでは承知しない作家であ

---

[53] 吉田裕『アジア・太平洋戦争　シリーズ　日本近現代史⑥』、岩波書店、2007年、230-235頁。

[54] 山崎豊子『作家の使命・私の戦後』、新潮社、2009年、108頁。

[55] 単行本全4冊・<一><二>1976年6月、<三><四>1978年8、9月刊・新潮社。

[56] 山縣基与志等編『山崎豊子・全小説を読み解く』、洋泉社、2009年、101頁。

[57] 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015年、274-281頁。

る」[58]と高く評価している。

前述したように、『不毛地帯』を書いている時に航空機汚職事件が発覚したり、『サンデー毎日』の連載中にロッキード事件が明るみに出たり、近い将来を先取りしているとも言えよう。これは山崎の予見ではなく、緻密な取材力と正確な情報把握・分析の賜である。

山崎の主人公設定は「戦時中の元大本営参謀」で、「戦後シベリアに 11 年の長期抑留」し、帰国後に「巨大な商社に入社し、そこで大出世を遂げて高度成長期の日本経済を牽引する」[59]壱岐正という人物である。この人物のモデルについて、山崎自身は明言していないが、保阪正康氏は、「『不毛地帯』の主人公は実際には複数の人間を総合して造形したものであるのに、同作の影響によって瀬島龍三だけがモデルであるとのイメージが世間に定着していった」[60]と指摘している。また、大澤真幸氏も、「『不毛地帯』の壱岐正は、瀬島龍三の人生からインスピレーションを得て造型された」[61]、と述べている。

この、壱岐正のモデルとされる瀬島龍三[62]とはどのような人物なのであろうか。彼は当然のごとく実在の人物である。軍人かつ大本営の参謀まで務めた人物であり、シベリア長期抑留の経験者である。瀬島は帰国後伊藤忠商事に入社し、『不毛地帯』が出版される頃には副社長にまで出世していた。後に同社長に上り詰めた瀬島は、「田中角栄や児玉誉士夫に並ぶ昭和史業界のビッグネームとなった」[63]のである。

二つ目の特徴は、時代性、つまり、戦争体験や戦後処理という部分を抜きにしては語れない。山崎は小説の中で次のシーンを設ける。

壱岐は帰還後、半年目、身体の回復が一段落した時、古本屋で六法全書を買い求めて、はじめて憲法の条文に目を通し、特に関心をもったのは、天皇の地位、国民主権にふれた第一条と、戦争放棄、軍備及び交戦権の否認を規定した第九条であった。

戦争とは勝つという確信がなければ絶対すべきでなく、軍人の道徳は戦に勝つことだということを、シベリア十一年の抑留生活を通して、身をもって味わった壱岐には、戦争放棄を是

---

[58] 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015 年、281 頁。

[59] 山縣基与志等編『山崎豊子・全小説を読み解く』、洋泉社、2009 年、100 頁。

[60] 保阪正康:『シベリア抑留から生還した黒幕「瀬島龍三」がフラれた「寂光院の女」』,週刊新潮,2011 年 2 月 24 日創刊 55 周年記念特大号。

[61] 大澤真幸「山崎豊子の〈男〉」、波、2017 年 1 月、82 頁。

[62] 瀬島　龍三（1911 年 12 月 9 日-2007 年 9 月 4 日）日本の陸軍軍人であり、実業家である。大本営作戦参謀などを歴任し、最終階級は陸軍中佐であった。戦後は伊藤忠商事の会長となり、中曽根康弘元首相の顧問など多くの要職に就任し、政治経済界に大きな影響力を持ち、「昭和の参謀」と呼ばれた。

[63] 山縣基与志等編『山崎豊子・全小説を読み解く』、洋泉社、2009 年、101 頁。

とする気持には変わりない。[64]

つまり、シベリア十一年の抑留生活を通して、壱岐はこの前の「軍人の道徳」を否認し、「戦争放棄を是とする気持」がある。憲法第九条をめぐる論争は今も続いている。

そして、「朔風会」というシベリア長期抑留者の会は小説の終始を貫いている。「朔風会」結成の目的は、「シベリアに眠っている遺骨が帰って来るまでは真の帰還はないとして、遺骨の帰還促進と遺族の援助、会員の相互扶助」[65]することである。つまり、この「朔風会」は政府の戦後処理行政機関ではなく、民間団体である。そして、「朔風会」により慰霊碑を建てることは、「戦友の霊を弔う」と同時に、「悲惨な犠牲の上に築き上げられた歴史の教訓を永遠に記録することになり」、それが「生きて祖国に還り着いた者の為すべきこと」[66]である。前述したように、小説の終章で、壱岐は近畿商事を退社し、朔風会の会長を引き受け、慰霊碑の建立と遺骨の収集を果たすために、第三の人生を過ごし始めた。この戦没者の遺骨収集の問題は現在にも残っている。山崎は戦後日本社会の裏に隠れている様々な問題を捉えて、壱岐正のように「生きて歴史の証人」だけではなく、戦争への反省と考えを永く語り伝えていると言えよう。

三つ目の特徴は、戦争体験を持つ山崎は、主人公壱岐正の生き方を通して、ある程度、当時の日本人の考えに合わせたと考えられる。それも『不毛地帯』がベストセラーになった要因だと思われる。「戦後日本をリードしてきた人間たち」は、「つまるところ軍人精神とその思想から出た国家観を共有しあい、『敗戦日本の正義』をうたい続ける」[67]、とジョン・ダワーは指摘している。しかし、戦争に負けて、日本人は大義を失い、多数の死者を出し、その敗北と喪失を全面的に引き受けた上で、壱岐は「けれども」大義を追求する。「国益」と「私的利益」を超えたものと信じうる大義を見出し、これを追求することに、壱岐は強い使命感を覚えることができる。「私は負けた。けれども……」という逆接は「この敗北を正面から受け入れた上での、大義への反転」[68]の中に、「男」がある。浅田次郎は、山崎を追悼する談話の中で、「男でも書けないような男らしい小説に興味を引かれた」[69]と述べている。社会学者大澤真幸によると、「山崎は大義や善を追求する「男」を描くのに成功する」[70]のである。

---

[64] 山崎豊子『不毛地帯(一)』、新潮文庫、2005年、457頁。

[65] 山崎豊子『不毛地帯(二)』、新潮文庫、2005年、89頁。

[66] 山崎豊子『不毛地帯(四)』、新潮文庫、2005年、437頁。

[67] ジョン・ダワー［著］三浦陽一・高杉忠明・田代泰子[訳]『増補版　敗北を抱きしめて(下)』、岩波書店、2004年、365-367頁

[68] 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015年、209-212頁。

[69] 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015年、198頁。

[70] 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015年、207

おわりに

『不毛地帯』を通して、戦争の悲惨さと不条理を納得しつつ、「戦後という時代を通して日本人の運命がどう変わっていったか、読者の皆さんがもう一度考えられるきっかけ」[71]と山崎は指摘している。また、社会評論家の大宅壮一氏は、1950 年代後半の日本の世相を「一億総白痴化」[72]という言葉で批判している。久野収氏も「国民のすべてが“思考の惰性”を厳しく反省しなおす必要に迫られる」[73]と述べている。日本人は高度成長の恩恵を享受してきたが、戦後の経済発展と平和は、多大なる犠牲の上に成り立ったものであることを改めて認識しなければならないだろう。

しかし、主人公壱岐正の生き方を通して、アジア･太平洋戦争についての山崎の認識は限界点があると考えられる。例えば、壱岐正のうちには、「日本人以外の民族」に対して、その「犯罪性を認識」[74]することがない。そして、山崎は、壱岐の軍人精神の立派さのみを強調するが、日本軍が満州や朝鮮及びその他の植民地で行った非道に関して壱岐の責任を有することを述べていない。

頁。

[71] 山崎豊子『作家の使命･私の戦後』、新潮社、2009 年、001 頁。

[72] 大宅壮一「言いたい放題」『週刊東京』、1957 年 2 月 2 日号。

[73] 佐高信編『城山三郎と久野収の「平和論」』、七つ森書館、2009 年、81 頁。

[74] 塩見鮮一郎「六、七〇年代のベストセラー作家再読⑤－再現された社会」、『創』、1980 年 1 月号、156-169 頁。

［新刊紹介］

清地ゆき子著『近代訳語の受容と変容：民国期の恋愛用語を中心に』

白帝社　4200 円

序章

第 1 章　恋愛用語の受容と変容の背景

第 2 章　新概念の受容と古典語の転用：〈恋愛〉の成立をめぐって

第 3 章　和語と和製漢語の中国語への移入：〈初恋〉と〈失恋〉を中心に

第 4 章　類義語の発生：〈恋人〉の移入をめぐって

第 5 章　近代訳語の意味の変遷と収斂：〈自由恋愛〉の解釈をめぐって

第 6 章　異形同義語の成立：〈三角関係/三角恋愛〉の成立

第 7 章　近代訳語の変容：〈同性恋〉の成立をめぐって

終章

関西大学中国語教材研究会編『シン式中国語学習シソーラス』

東方書店　2200 円

「シン式」とは何かを含め、前書きには次のように説明している。

ここ数年、語彙力の本が書店の店頭を賑わせている。ところで一体、語彙力とは何か？如何にそれを獲得するのか？語彙力＝語の量＋一部の慣用句・イディオムと捉えられがちだが、編者は、語彙力には 2 つの側面があり、1 つは、異なる事・物の名前をたくさん知ること（語彙の広さ）、いま 1 つは、同じ事・物の異なる名前をたくさん知ること（語彙の深さ）と考えている。前者は外国語を学習する場合（特に初習者）によく問題になるが、後者は、外国語学習者はさることながら、ネイティブ・スピーカーでも意識的に学習しなければ身につかないものである。

語彙を体系的に捉えれば、語彙の広さはつまり同義語グループの数に関係する。中型の国語辞書の見出し語（7-9 万語）を意味によってグループ分けすれば、3000～4000 のうちに収まる。私たちは日常的にこの 4000 の同義語グループから語を選び出して言語生活を送っている。一方、語彙の深さとは何だろうか。語は、仲間を呼ぶ。意味が同じ、或いは近いもの同士がグループを作り上げる。それぞれのグループでメンバーの多寡は違うが、多いほど、描写が細かくなる。このように語彙力は、レトリックの力（修辞力）に直結する。同義語の知識がなければ、レトリックもあり得ない。以上から分かるように語彙の広さは表現の可能性を保証するが、語彙の深さは表現の的確さ、美しさといった修辞力を提供する。